

基本計画書

基本計画書									
事項	記入欄								備考
計画の区分	研究科の専攻に係る課程の変更								
フリガナ設置者	ガッコウホウジン タカサキケンコウフクシダイガク 学校法人 高崎健康福祉大学								
フリガナ大学の名称	タカサキケンコウフクシダイガクダイガクイン 高崎健康福祉大学大学院								
大学本部の位置	群馬県高崎市中大類町37-1番地								
大学の目的	本大学院は、学部における広い教養並びに専門的教育の上に、高度にして専門的な学術の理論及び応用を教授研究し、さらに進んで研究指導能力を養い、もって人類の健康と福祉の増進に貢献することを目的とする。								
新設研究科等の目的	本研究科理学療法専攻博士後期課程は、理学療法学に関わる研究・実践の成果を国内外に発信し、従来のリハビリテーションシステムを改善することができる高度専門的職業人としての応用的能力を備えた人材を養成することを目的とする。								
新設研究科等の概要	新設研究科等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地
	保健医療学研究科 理学療法専攻 博士後期課程	3年	2人	—	6人	博士 (理学療法学)	保健衛生学関係 (リハビリテーション関係)	令和8年4月 第1年次	群馬県高崎市中大類町27
	計		2	—	6				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)	人間発達学部 心理学科 (40) (令和7年3月認可申請) 令和8年4月 名称変更予定 保健医療学研究科理学療法専攻修士課程 → 保健医療学研究科理学療法専攻博士前期課程								
教育課程	新設研究科等の名称	開設する授業科目の総数				修了要件単位数			
	理学療法専攻 博士後期課程	講義	演習	実験・実習	計	12 単位			
		7 科目	5 科目	0 科目	12 科目				
研究科等の名称	専任教員					助手	専任教員以外の教員 (助手を除く)		
	教授	准教授	講師	助教	計				
新設分	保健医療学研究科 理学療法専攻 (博士後期課程)	11人 (11人)	2人 (2人)	2人 (2人)	2人 (2人)	17人 (17人)	—人 (—)	—人 (—)	
	計	11人 (11人)	3人 (3人)	2人 (2人)	2人 (2人)	17人 (17人)	—人 (—)	—人 (—)	
既設分	健康福祉学研究科 医療福祉情報学専攻 (修士課程)	9人 (9人)	1人 (1人)	—人 (—)	—人 (—)	10人 (10人)	—人 (—)	—人 (—)	
	健康福祉学研究科 保健福祉学専攻 (博士前期課程)	5人 (5人)	3人 (3人)	—人 (—)	—人 (—)	8人 (8人)	—人 (—)	—人 (—)	
	健康福祉学研究科 食品栄養学専攻 (博士前期課程)	6人 (6人)	3人 (3人)	2人 (2人)	—人 (—)	11人 (11人)	—人 (—)	—人 (—)	
	健康福祉学研究科 保健福祉学専攻 (博士後期課程)	9人 (9人)	—人 (—)	—人 (—)	—人 (—)	9人 (9人)	—人 (—)	—人 (—)	
	健康福祉学研究科 食品栄養学専攻 (博士後期課程)	7人 (7人)	—人 (—)	—人 (—)	—人 (—)	7人 (7人)	—人 (—)	—人 (—)	
	薬学研究科 薬学専攻 (博士課程)	17人 (17人)	6人 (6人)	—人 (—)	—人 (—)	23人 (23人)	—人 (—)	—人 (—)	
	保健医療学研究科 看護学専攻 (修士課程)	11人 (11人)	6人 (6人)	9人 (9人)	—人 (—)	26人 (26人)	—人 (—)	46人 (46人)	
	保健医療学研究科 理学療法専攻 (修士課程)	14人 (14人)	2人 (2人)	1人 (1人)	2人 (2人)	19人 (17人)	—人 (—)	—人 (—)	
	農学研究科 生物生産学専攻 (博士前期課程)	8人 (8人)	7人 (7人)	3人 (3人)	—人 (—)	18人 (18人)	—人 (—)	—人 (—)	
	農学研究科 生物生産学専攻 (博士後期課程)	8人 (8人)	7人 (7人)	3人 (3人)	—人 (—)	18人 (18人)	—人 (—)	—人 (—)	
	計	70人 (70人)	28人 (28人)	15人 (15人)	2人 (2人)	115人 (115人)	—人 (—)	—人 (—)	
合計	70人 (70人)	28人 (28人)	15人 (15人)	2人 (2人)	115人 (115人)	—人 (—)	—人 (—)		

職 種		専 属		そ の 他		計		
		人		人		人		
事 務 職 員		75 (75)		0 (0)		75 (75)	大学全体	
技 術 職 員		0 (0)		2 (2)		2 (2)		
図 書 館 職 員		8 (8)		1 (1)		9 (9)		
そ の 他 の 職 員		1 (1)		14 (14)		15 (15)		
指 導 補 助 者		0 (0)		0 (0)		0 (0)		
計		84 (84)		17 (17)		101 (101)		
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計		
	校 舎 敷 地	51,019.56 m ²	0 m ²	0 m ²		51,019.56 m ²	大学全体	
	そ の 他	10,550.00 m ²	0 m ²	0 m ²		10,550.00 m ²		
	合 計	61,569.56 m ²	0 m ²	0 m ²		61,569.56 m ²		
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計		
		38,403.86 m ² (38,403.86 m ²)	0 m ² (0 m ²)	0 m ² (0 m ²)		38,403.86 m ² (38,403.86 m ²)	大学全体	
講義室等・新設研究科等 の専任教員研究室		講義室	実験・実習室	演習室		新設研究科等 の専任教員研究室		
		48 室	88 室	61 室		198 室	大学全体	
図 書 ・ 設 備	新設研究科等の名称	図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕		機械・器具	標本	
		冊	電子図書 〔うち外国書〕	種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	点	点	
	理学療法学専攻 博士後期課程	41,379 [2,087] (39,041 [2,013])	292 [0] (272 [0])	13,172 [11,515] (13,172 [11,515])	382 [62] (382 [62])	451 (451)	44 (44)	
	計	41,379 [2,087] (39,041 [2,013])	292 [0] (272 [0])	13,172 [11,515] (13,172 [11,515])	382 [62] (382 [62])	451 (451)	44 (44)	
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次
		教員1人当り研究費等		400千円	400千円	400千円	－千円	－千円
		共同研究費等		5,000千円	5,000千円	5,000千円	－千円	－千円
		図書購入費	0千円	0千円	0千円	0千円	－千円	－千円
	設備購入費	0千円	0千円	0千円	0千円	－千円	－千円	
	学生1人当り 納付金			第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次
			800千円	700千円	700千円	－千円	－千円	
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入等					

既設大学等の状況	大学等の名称		高崎健康福祉大学大学院						開設年度	所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率				
		年	人	年次人	人		倍				
既設大学等の状況	健康福祉学研究科									群馬県高崎市 中大類町37-1	
	医療福祉情報学専攻 修士課程	2	3	—	6	修士 (医療福祉情報学)	0.50	平成 17年度			
	保健福祉学専攻 博士前期課程	2	3	—	6	修士 (保健福祉学)	0.66	平成 17年度			
	食品栄養学専攻 博士前期課程	2	4	—	8	修士 (食品栄養学)	0.50	平成 17年度			
	保健福祉学専攻 博士後期課程	3	3	—	9	博士 (保健福祉学)	0.44	平成 19年度			
	食品栄養学専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士 (食品栄養学)	0.66	平成 19年度			
	薬学研究科									群馬県高崎市 中大類町60	
	薬学専攻博士課程	4	3	—	12	博士 (薬学)	0.50	平成 24年度			
	農学研究科									群馬県高崎市 中大類町54	
	生物生産学専攻 博士前期課程	2	4	—	8	修士 (農学)	1.50	令和 4年度			
	生物生産学専攻 博士後期課程	3	2	—	6	博士 (農学)	0.33	令和 4年度			
	保健医療学研究科									群馬県高崎市 中大類町27	
看護学専攻 修士課程	2	6	—	12	修士 (看護学)	1.00	平成 24年度				
理学療法学専攻 修士課程	2	3	—	6	修士 (理学療法学)	1.16	平成 30年度		※令和8年4月 名称変更 理学療法学専攻 博士前期課程		
既設大学等の状況	大学等の名称		高崎健康福祉大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所在地		
		年	人	年次人	人		倍				
	高崎健康福祉大学										
	健康福祉学部						1.12		群馬県高崎市 中大類町37-1		
	医療情報学科	4	80	—	320	学士 (医療情報学)	1.10	平成 13年度		令和5年度入学定員増 (10人)(医療情報学科)	
	社会福祉学科	4	75	—	300	学士 (社会福祉学)	1.19	平成 13年度		令和5年度入学定員増 (15人)(社会福祉学科)	
	健康栄養学科	4	80	—	320	学士 (健康栄養学)	1.08	平成 13年度			
	薬学部						1.04		群馬県高崎市 中大類町60		
	薬学科	6	90	—	540	学士 (薬学)	1.04	平成 18年度			
	保健医療学部						1.10		群馬県高崎市 中大類町27		
	看護学科	4	100	—	400	学士 (看護学)	1.06	平成 18年度			
理学療法学科	4	40	—	160	学士 (理学療法学)	1.21	平成 22年度				
人間発達学部						1.11		群馬県高崎市 中大類町58-2			
子ども教育学科	4	80	—	320	学士 (教育学)	1.11	平成 24年度				
農学部						0.93		群馬県高崎市 中大類町54			
生物生産学科	4	75	—	300	学士 (農学)	0.93	平成 31年度		令和5年度入学定員減 (25人)(生物生産学科)		

<p>附属施設の概要</p>	<p>名 称：高崎健康福祉大学附属クリニック 目 的：地域の人々の健康維持増進、大学教職員及び学生の健康管理 所在地：群馬県高崎市中大類町200-2番地</p> <p>名 称：総合福祉研究所 目 的：福祉関連領域の学内外の研究者が共同して行う研究の支援 所在地：群馬県高崎市中大類町37-1</p> <p>名 称：子ども・家族支援センター 目 的：子どもと家族における心と体の問題についての相談支援 所在地：群馬県高崎市中大類町58-2</p> <p>名 称：ボランティア・市民活動支援センター 目 的：学生のボランティア・市民活動への参加と大学の地域貢献の促進 所在地：群馬県高崎市中大類町58-2</p> <p>名 称：国際交流センター 目 的：大学の国際化とグローバルな人材養成を目指した国際交流支援 所在地：群馬県高崎市中大類町58-2</p> <p>名 称：看護実践開発センター 目 的：地域で保健医療の実践に携わる看護職の質的能力の向上を目指し、実践教育及び研修を行う 所在地：群馬県高崎市中大類町27</p> <p>名 称：健康管理センター 目 的：大学教職員及び学生の健康保持・増進の支援 所在地：群馬県高崎市中大類町36-2</p>	
----------------	---	--

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員以外の教員	
共通科目	共通分野	保健医療統計特論	1前		2			○							2	オムニバス	
		チーム医療特論	1前		1			○			1				4	オムニバス	
		チーム医療アプローチ特別演習	1前		1				○		2				1	オムニバス	
		地域支援学特論	1前			1		○			1				4	オムニバス	
		健康科学特論	1前			2		○			1				2	オムニバス	
		病態生理学特論	1前			2		○			2				1	オムニバス	
		医療栄養学特論	1前			2		○							1		
		薬物動態学特論	1前			2		○							1		
		医療倫理学特論	1後			2		○							2	オムニバス	
		教育学特論	1後			2		○			1				3	オムニバス・共同(一部)	
		英文読解・英作文の技法	1後			1		○							1		
小計(11科目)		—	—	4	14			—		5				17			
専門科目	理学療法領域共通科目	研究倫理と理学療法学研究法	1前		2			○		1	1					オムニバス	
		障害予防学特論	1前		2		○			5	1					オムニバス	
		自立生活支援学特論	1後		2		○			6	1					オムニバス	
		地域リハマネージメント特論	1後		2		○			5						オムニバス	
		障害評価・解析学特論	1前		2		○			4	1					オムニバス	
		臨床推論特論	1後		2		○			5		1				オムニバス	
		理学療法実践学特論	1後		2		○			5		1				オムニバス	
	小計(7科目)		—	—	2	12			—	9	1	1					
	療法学分野	地域リハビリテーション特論	1前		2			○			6	1					オムニバス
		地域理学療法学特論	1後		2			○			5		1				オムニバス
		地域リハビリテーション演習	1前		2				○		6	1					共同
		地域理学療法学演習	1後		2				○		2		1				共同
		地域理学療法学特別研究	2通		8				○		6	1	1				
	小計(5科目)		—	—	16				—	6	1	1					
	臨床療法学分野	臨床理学療法学特論Ⅰ	1前		2			○			4	1					オムニバス
		臨床理学療法学特論Ⅱ	1後		2			○			5	1					オムニバス
臨床理学療法学演習Ⅰ		1前		2				○		3	1					共同	
臨床理学療法学演習Ⅱ		1後		2				○		3	1					共同	
臨床理学療法学特別研究		2通		8				○		6	1						
小計(5科目)		—	—	16				—	7	1							
合計(28科目)		—	—	38	26			—	12	2	1			17			
学位又は称号		修士(理学療法学)			学位又は学科の分野			保健衛生学関係									
卒業・修了要件及び履修方法									授業期間等								
「共通分野」の必修科目4単位、「理学療法学領域共通科目」の必修科目2単位、共通科目「共通分野」もしくは「理学療法学領域共通科目」から選択科目8単位以上、「地域理学療法学領域専門科目」もしくは「臨床理学療法学領域専門科目」から必修科目16単位(特別研究を含む)を修得し、合計30単位以上を修得すること。さらに、修士論文を提出し、本大学院が行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。									1学年の学期区分			2学期					
									1学期の授業期間			15週					
									1時限の授業の標準時間			90分					

教 育 課 程 等 の 概 要																
(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員以外 (助手を除く) の教員
基礎科目	医療・研究倫理学	1前		2			○			4						オムニバス
	リハビリテーションシステム論	1後			2		○			6		1				オムニバス
	理学療法教育・管理論	2通			4		○			5						オムニバス
	小計(3科目)	—	—	2	6		—			10	0	1	0	0	0	
専門科目	基礎理学療法学特講	1前			2		○			2	2					オムニバス
	基礎理学療法学演習	1後			2			○		2	2					オムニバス
	神経・発達理学療法学特講	1前			2		○			3	1	1				オムニバス
	神経・発達理学療法学演習	1後			2			○		3	1	1				オムニバス
	運動器・スポーツ理学療法学特講	1前			2		○			4			1			オムニバス
	運動器・スポーツ理学療法学演習	1後			2			○		4			1			オムニバス
	加齢・予防理学療法学特講	1前			2		○			4		1	1			オムニバス
	加齢・予防理学療法学演習	1後			2			○		4		1	1			オムニバス
	理学療法学特別研究	1~3通		6				○		11	2	1				オムニバス
小計(9科目)	—	—	—	6	16		—		11	2	2	2	0	0		
合計(12科目)		—	—	8	22		—		11	2	2	2	0	0		
学位又は称号	博士(理学療法学)			学位又は学科の分野			保健衛生学関係									
卒業・修了要件及び履修方法							授業期間等									
「基礎科目」の必修2単位、「専門科目」より専攻する専門分野の選択科目を2科目4単位及び特別研究6単位を履修し、合計12単位以上を修得すること。 また、査読付英文学術誌に筆頭著者として掲載された学術論文を提出し、本大学院の行う論文審査及び最終試験に合格すること。							1学年の学期区分				2学期					
							1学期の授業期間				15週					
							1時限の授業の標準時間				90分					

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程）				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 科目	共通 分野	保健医療統計特論	<p>（概要） 初歩的な記述統計・推測統計から多変量解析まで、保健医療分野で用いられる統計解析法を統計ソフトなどを用いて教授する。（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（31 長井万恵／13回） 研究におけるエビデンスについて量的研究と質的研究の比較をもとに教授する。保健医療分野における論文作成のための量的研究法における統計学の基礎を学び、統計学的推定・検定の方法、標本数の定め方、因果推論モデルについて教授する。更に、多変量解析の基礎から応用（重回帰分析、主成分分析、因子分析）まで、実践的に適用可能な統計学手法を教授する。</p> <p>（34 飯田義裕／2回） Excelを用いた統計解析について教授する。</p>	オムニバス方式
		チーム医療特論	<p>（概要） 施設から在宅、地域を貫くチーム医療の基本的考え方と求められる資質について教授する。呼吸リハビリテーション、地域リハビリテーション、認知症ケアにおけるチーム医療の今日的課題と今後の在り方について検討し、患者・家族の健康問題をリハビリテーション専門職や看護専門職の協働の力で解決しQOLの向上を目指すためのチーム医療を担う高度専門職の役割と実践について教授する。（オムニバス方式／全8回）</p> <p>（1 渡邊秀臣／2回） チーム医療の基本的考え方と求められる資質や今日的課題および医療事故防止における多職種連携の重要性について教授する。</p> <p>（19 梅原里実／1回） 看護学分野におけるチーム医療の今日的課題から、認知症高齢者ケアにおけるチーム医療と連携の実践について教授するとともに、チーム医療を担う専門職者の役割と課題について教授する</p> <p>（22 寺口顕子／1回） 看護学専攻の中でも助産学・リプロダクティブヘルス看護学分野におけるチーム医療の役割と実際を教授する。具体的には、女性の生涯にわたる健康課題、妊娠期・分娩期・産褥・子育て期の課題から最近のトピックスとして出生前検査と妊娠葛藤、リスクに応じた周産期医療体制、地域における子育て世代包括支援を取り上げ、今後の女性、母子と家族への高度実践と多職種連携について学習・意見交換を行う。</p> <p>（24 浅香満／2回） リハビリテーション分野におけるチームアプローチについて教授する。リハビリテーション医療は当初よりチームアプローチを基本として構築されてきた。その経緯の中から、他職種との連携の必要性、具体的な連携の取り方などについて学習する。良いチームアプローチは関係する職種の正しい理解と、システムの理解が基本となる。包括的呼吸リハビリテーションチームや地域連携パスなどを通して、具体的に上記の内容について学習する。</p> <p>（30 山上徹也／2回） ①群馬県の地域リハ広域支援センターや介護予防サポーター養成研修を紹介し、地域のボランティアスタッフと専門職（保健師、理学療法士、作業療法士）が協力して実施した事業を例に挙げ、地域支援事業や介護予防事業におけるチームのあり方、専門職の役割について共に考え、②自身が取り組んでいる脳活性化リハや作業回想法を紹介し、介護保険施設や認知症ケア場面など、限られたマンパワーの中で対象者の能力を引き出すための効果的なチーム医療・チームケアを推進するための現状と課題について教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共 通 科 目	共 通 分 野	チーム医療アプローチ特別演習	<p>(概要) 患者およびその家族の健康問題を解決し、日常生活における様々な問題に対処することでQOLの向上を目指すために、多職種によるチームアプローチが必要となる事例を学習する。各専門職（看護師、医師、リハビリテーション専門職、栄養士、薬剤師、介護福祉士、ソーシャルワーカーなど）に求められる機能を検討し、チームアプローチを推進するための、それぞれの働きや得意分野、守備範囲を教授した上で、機能的・効率的医療提供に結びつくコーディネート法を教授する。（オムニバス方式／全8回）</p> <p>(3 吉田剛／2回) リハビリ専門職の役割、実際について学習する。プレゼンテーションにより、コミュニケーション能力の増進をはかる。</p> <p>(4 田中聡一／4回) 医師および他のメディカルスタッフの役割、実際について学習する。プレゼンテーションにより、コミュニケーション能力の増進をはかる。</p> <p>(18 棚橋さつき／2回) 看護師の役割、実際について学習する。プレゼンテーションにより、コミュニケーション能力の増進をはかる。</p>	オムニバス方式
	地域支援学特論	<p>(概要) 在院日数の短縮による病院から在宅・地域への医療の移行や少子高齢化社会における家族の多様化が、健康問題を抱える個人を含む家族や地域にもたらす様々な問題について検討し、個人・家族・地域を繋いだ包括的なサポートについて学ぶ。 独居老人の生活、老老介護の問題、介護負担、虐待などの社会問題には家族の抱える問題が潜んでいることを踏まえ、地域における療養者、家族の生活を支える看護支援やリハビリテーション、地域支援のあり方を学ぶ。（オムニバス方式／全8回）</p> <p>(9 篠原智行／2回) 在宅生活を継続するためのリハビリテーションの役割について、専門職の連携や課題について考察できるよう教授する。</p> <p>(18 棚橋さつき／2回) 在宅看護学的視点から、患者・家族への地域支援の在り方や今後の展望について教授する。</p> <p>(19 梅原里実／1回) 老年看護学の視点から在宅・地域における介護家族への支援に関する課題について検討し、支援のあり方を考察できるよう教授する。</p> <p>(21 倉林しのぶ／2回) 地域における生活者の視点で対象を捉え、生活環境や家族背景から生じる倫理的課題とその解決に向けた考え方について教授する。</p> <p>(22 寺口顕子／1回) 地域における子育ての現状と課題について、子育て世代包括支援センターの事業を含め教授する。</p>	オムニバス方式	

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共 通 科 目	共 通 分 野	健康科学特論	<p>(概要) 健康寿命の延伸には、栄養、身体活動・運動、心の安静、生体防御機構(免疫)の維持が必須である。栄養については、「医療栄養学特論」において教授するので、本授業では、健康の仕組み、身体活動・運動、心の安静、免疫の健康維持における重要性を科学的根拠に基づき教授する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 渡邊秀臣 / 4回) 身体活動・運動が、エネルギー消費による肥満予防や筋力増強だけでなく、骨粗しょう症の予防、血液循環改善など、健康維持に重要な役割を果たしている事を、科学的根拠に基づいて教授する。</p> <p>(2 桑原敦志 / 6回) 健康維持のためのホメオスタシス系の相互作用全般について教授する。さらに、ホメオスタシス系の一つである生体防御システムと内分泌系について教授する。</p> <p>(2 4 角野善司 / 5回) ストレスは、健康障害の主要因の一つであり、心の安静はストレスによる健康障害解除に必須である。ストレスの引き起こす生体反応と健康障害のメカニズム及びストレスへの対策について教授する。</p>	オムニバス方式
		病態生理学特論	<p>(概要) 病態を的確に理解し、根拠に基づいた医療実践のために必要な基礎医学的知識を教授する。病態を的確かつ経時的に把握するための医療手段の一つとして臨床検査があり、現代医療の中心的存在となっており、その基礎事項を教授する。また、病態生理学を基礎から学習し、科学的な判断ができるようにする。特に病気の発症や進行、重症化に大きく関わる知識を学習し、医療提供者として必要な基礎事項を指導する。(オムニバス方式/15回)</p> <p>(1 渡邊秀臣 / 3回) 運動器および末梢神経系の病態生理学を詳細に教授する。それぞれの病態生理について、疾患ごとにその特徴について説明できるように教授する。</p> <p>(4 田中聡一 / 6回) 循環器、腎・泌尿器系、神経系、そして運動・感覚系の病態生理学を詳細に教授する。それぞれの病態生理について、疾患ごとにその特徴について説明できるように教授する。</p> <p>(2 3 桑原敦志 / 6回) 病態を客観的かつ効率的に判断する方法に臨床検査があり、その手法と意義について教授する。主に生活習慣病の症例を挙げ、適切な検査法を選べるように教授する。</p>	オムニバス方式
		医療栄養学特論	<p>(概要) 傷病者の栄養状態の評価し、適切な栄養補給方法を選択するために、栄養スクリーニング及び栄養アセスメントを実施し、栄養ケア計画を立案する。また疾病の栄養学的問題点を改善し、治療効果を向上させるための栄養療法を提案する。そして、チーム医療における多職種協働の中で、職種間をリンクさせる役割を担う看護を目指すことを目的として、臨床現場における医療栄養について教授する。講義のほか、文献紹介・文献購読及び対話・発表を含めた授業内容とする。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共 通 科 目	共 通 分 野	薬物動態学特論	<p>(概要)</p> <p>薬物の生体膜透過機構、生体内での吸収、体内分布、代謝および排泄、ファーマコキネティクス理論による体内薬物濃度の解析と血中薬物濃度モニタリング (TDM) の意義を教授する。さらに、患者ごとの病態や年齢、遺伝子多型、併用薬の違いによる薬物の体内動態要因の変動を教授し、患者ごとの薬物の投与経路、投薬量および投薬間隔を実際の事例を基に解析・決定する手法を教授する。</p>	
		医療倫理学特論	<p>(概要)</p> <p>医療技術の進歩に伴い、臨床の倫理的問題は山積されている。また、ベッドサイドの倫理問題は、患者、家族、医療者それぞれの「価値観」が大きく影響し、複雑化・多様化している。本講義では、「生殖医療」「脳死」「臓器移植」など、近年の医療倫理学に関する諸問題を学ぶだけでなく、臨床現場で起こりうる個々の倫理的問題について、具体的な事例を用い理論的な検討を行う。また、文献購読やグループディスカッションを通して、“医療を行う側”と“医療を受ける側”それぞれの立場における価値観の相違や、倫理的問題を取り巻く背景を理解しながら問題解決の方策を探る。(オムニバス方式/15回)</p> <p>(21 倉林しのぶ/8回)</p> <p>事例検討や文献購読を通じ、原則や倫理綱領のみに捉われず、日常的なケアのなかで倫理的問題に気づき倫理的判断ができる能力の習得を目指す。事例をもとに「自己決定」「インフォームド・コンセント」「告知」「守秘義務」などのテーマでグループディスカッションを行い、ケアを実施する立場である医療者サイドと、患者・家族など医療を受ける立場からの“よりよい医療”について検討する。臨床における倫理的課題の背景とさまざまな人間関係を理解し、その解決に向けたプロセスの方法について教授する。</p> <p>(28 大石桂子/7回)</p> <p>先端医療における「脳死・臓器移植」「生殖医療」「エンハンスメント」などのトピックを題材に、医療に関わる「倫理学の基礎」を教授する。また、問題の背景にある現代の多様な価値観を構築してきた倫理思想、宗教、文化なども取り上げ、医療における患者の人権、医師・患者関係、終末期医療などの倫理問題について議論を行い、根拠をもって問題を判断し、論理的に表現する力を養う。</p>	オムニバス方式
		教育学特論	<p>(概要)</p> <p>保健師・助産師・看護師、理学療法士は、医療専門職として後輩の育成に関わる責務を持つ。そのため、基礎教育機関や卒業教育機関に教員として就業する者のみならず、多様な立場で何らかの教育的機能の発揮が求められる。教育の対象者の多くは青年期から成人期にある成人であり、初等・中等教育の対象とは発達段階が異なる。そこで、成人学習者を対象とした高等教育という観点から教育活動を行うための知識・技術を教授する。(オムニバス方式・共同(一部)/15回)</p> <p>(12 樋口大輔/6回)</p> <p>授業展開の演習において、個別の指導を行う。</p> <p>(20 小池洋子/14回)</p> <p>授業設定をする上での教育目的・目標の設定、授業方法、教育評価などについて授業を行い、授業展開の演習において個別指導を行う。</p> <p>(26 茂木佐智子/7回)</p> <p>成人学習理論についての授業を行い、授業展開の演習において個別指導を行う。</p>	オムニバス方式・共同(一部)

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目区分		授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通科目	共通分野	英文読解・英作文の技法		<p>(概要) 保健医療学の英語論文を読み、クリティークするための基礎的能力を教授する。研究論文のabstractを書く能力を教授する。</p>	
専門科目	理学療法領域 共通科目	研究倫理と理学療法学研究法		<p>(概要) 研究倫理に関する最新の考え方を理解したうえで、理学療法に研究倫理に関する最新の考え方を理解したうえで、理学療法におけるエビデンス構築のための研究の意義・役割および研究に必要な基礎的知識を習得する。人を対象とする研究の特殊性・倫理性を踏まえ、妥当性・信頼性の高い研究とはどのようなものか、研究を批判吟味するための視点を学ぶ。実験研究、準実験研究、調査研究、尺度開発および介入研究のプロセス（研究テーマの明確化、文献検討、研究デザインの選択、対象の選定、データ収集方法、データ分析方法、結果、考察）について教授する。（オムニバス方式／15回）</p> <p>(4 田中聡一／2回) 医学系研究の倫理指針に対する理解を深め、各学生の研究計画における倫理的配慮の必要性と具体的な基礎知識が身につくように教授する。また、地域リハビリテーションシステムやニード調査、介護負担やQOLなどの場面では調査研究を行う場合があるが、調査研究の手法やそのための準備について教授する。</p> <p>(14 富田洋介／13回) この講義は、理学療法の分野における研究の意義と役割を深く理解することを目的としている。研究倫理に関する最新の考え方を学び、人を対象とした研究の特殊性と倫理性を踏まえた、妥当性と信頼性の高い研究デザインの作成方法を習得することが求められる。研究プロセス全般（テーマ選定、文献検討、デザイン選択、データ収集と分析）について包括的に学ぶことができる。「理学療法研究の基礎と倫理」では理学療法におけるエビデンス構築のための研究の重要性とその倫理的側面を探索する。「研究デザインとその応用」では実験研究、準実験研究、調査研究、尺度開発、介入研究の各プロセスを詳細に学び、具体的な研究計画の立案方法を教授する。「データの収集と分析」では効果的なデータ収集手法とデータ管理のポイントを学び、統計解析手法の基礎から応用までを習得する。「研究成果の批評と発表」では研究成果の評価方法と批評の視点を学び、科学的コミュニケーション能力を高める。「統計的解析技術」では基本的な統計解析手法とその研究での適用について学び、研究結果の解釈と報告の方法を教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	理 学 療 法 学 領 域 共 通 科 目	理 学 療 法 学 領 域 共 通 科 目	<p>障害予防学特論</p> <p>(概要) 地域で暮らす人が、健康を維持しながら障害予防、疾病予防を 実践し健康寿命を延伸していくために、理学療法士に求められる 知識および技術について広く考える基盤を養う。障害の発生 に關与する因子について生活環境の影響を踏まえて広くとら え、予測的対応についてより具体的に考えるための基礎を教授 する。(オムニバス方式/15回)</p> <p>(3 吉田剛/3回) 障害の程度は、疾患だけで決まるわけではなく、対象者の価値 感や自己管理能力など個性のある問題が影響することが多い ことを示し、まだ多くはないがそれらの側面を評価するための 評価指標について教授する。また、近年死亡原因の3位にまで 増えてきた肺炎の中で大半を占めると言われている誤嚥性肺炎 について取り上げ、その兆候や対処方法、呼吸・嚥下機能低下 の予防に関する考え方を教授する。</p> <p>(4 田中聡一/3回) 超高齢社会において地域在住高齢者が、健康を維持しながら介 護予防、障害再発予防、疾病予防を實踐し、健康寿命を延伸し ていくために必要な知識の一つとして障害予防の概念をまと め、特に大きな影響を及ぼしてくる老年症候群と認知症に關する 予防のためにどのような基礎知識が必要かを教授する。これ らの基礎知識を深くもたせることで、多角的な視点で障害予防 をとらえられるように導く。 臨床においても地域においても認知症の問題は、単独または 重複した問題として避けて通れない問題となっている。現在取 り組まれている認知症の発症予防および認知症の進行予防につ いての考え方と取り組み方法およびその効果についてまとめて 教授する。</p> <p>(5 解良武士/3回) 障害発生に大きく關与する生活不活発病と言われる廃用症候群 の原因を追究し、ライフスタイルや地域環境との関連性などに ついて教授する。また、生活環境と活動性との関連性について 特に起きる・立つ・歩くといった基本動作に着目して教授す る。近年フレイル(虚弱)やサルコペニア(加齢性筋肉減少 症)といった概念で地域虚弱高齢者のもつ問題をとらえること ができるようになってきた。これらの概念やスクリーニング方 法について教授すると同時に、現在どれ位の対象者がいるの か、地域で今後行っていくべき対応策などについて教授する。</p> <p>(10 中川和昌/3回) 障害を予防するためには、障害の予後予測ができることが不可 欠である。この障害の予後予測に使われる評価指標について現 在使われているものを概観する。また、整形外科領域における 全国的な取り組みとして行われてきたロコモ予防について、こ れまでの取り組み方とその効果を示し、取り組みで用いた評価 指標などについて教授する。さらに、地域で行われている健康 体操について、その取り組みの内容を分析し、その意義やさら にどのような観点で取り組むべきかを考える機会を与えるよう 教授する。</p> <p>(11 正木光裕/3回) 脳性麻痺、ダウン症といった小児患者において、発達段階(加 齢も含む)の中で必要となる運動機能に対する障害予防に關し て、臨床経験および研究結果に基づいた視点から教授する。ま た、発達障害といった小児患者において、発達段階の中で必要 となる認知機能に対する障害予防に關しても教示する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	理 学 療 法 学 領 域 共 通 科 目	理 学 療 法 学 領 域 共 通 科 目	<p>自立生活支援学特論</p> <p>(概要) 超高齢社会において要介護高齢者が増加し、十分な介護サービスの提供も困難になってきており、介護高齢者に対して必要な介護サービスを提供するだけでなく、できるだけ本人の潜在能力を引き出すことでより自立した生活を送ることを理学療法士として支援していく取り組みが求められている。在宅生活において求められている自立生活支援サービスの現状を知り、生活に対応するために必要な広い知識を身につけより高い問題解決能力を有する在宅サービス指導を行うための基礎を教授する。(オムニバス方式/15回)</p> <p>(3 吉田剛/2回) より自立した在宅生活を送るためには、医療機関から退院する際の退院前からの支援はとて重要である。その際に本人の動作能力と生活環境とのマッチングを図るように調整することと、本人およびそれを支える家族に対しても退院後の生活が見えるように指導することが重要である。住宅改修や福祉用具の活用、患者・家族教育に対する指導の在り方について教授する。</p> <p>(4 田中聡一/2回) 超高齢社会において要介護高齢者が増加し、十分な介護サービスの提供も困難になってきており、介護高齢者に対して必要な介護サービスを提供するだけでなく、本人の潜在能力を引き出すことでより自立した生活を送ることを支援していく取り組みが求められている。この自立生活支援の考え方をまとめ、現在行われているサービスの実態を伝え、今後の自立支援の在り方を考えるきっかけとなるように教授する。</p> <p>(5 解良武士/2回) 自立生活支援を行うための基礎的知識として、自立生活を行う上で必要となる動作能力およびそれに必要な運動要素について、理解を深めるように教授する。また、動作能力が実際の生活場面で安全に発揮できるかどうかは、本人の自信の程度や、自己管理能力にかかっていることについて教授する。また、自立する過程で一番判断が難しい見守り～自立への段階化をどのように考えていけばよいのかについて教授する。</p> <p>(9 篠原智行/3回) 地域生活を送る中で、住民自らが健康増進に努める自助や、社会保障や行政サービスといった共助・公助がある。いずれも生活機能の自立の促し、あるいはフレイルや介護予防を目的の一つとしているが、それが実際に地域の中でどのように実践されているかを、実践例や調査研究を供覧しながら教授する。また、理学療法士が専門性を活かしながらいかに地域づくりに関わられるか、関わるべきかを学ぶ。</p> <p>(10 中川和昌/2回) 退院後の在宅生活を送る中で、より自立した生活を送るよう支援する方法として訪問理学療法は有効なサービスである。訪問理学療法場面の様々な実例を通して、訪問の場でどのようなことが問題になるのか、それをどのように評価しどのような考えでサービスを提供するべきか、そのために対象者やその家族、関連他職種などに対してどのような働きかけが必要なのかなど、自立生活支援の実際がわかるように教授する。</p> <p>(11 正木光裕/2回) 地域の高齢者における見守りと自立の境界および段階化についての考え方にに関して、臨床経験および研究結果に基づいた視点から教授する。また、高齢者において、運動教室や訪問リハビリテーションをはじめとする退院支援の実際(患者・家族教育)に関しても教示する。</p> <p>(14 富田洋介/2回) 装具療法は在宅での自立生活を行う上で有用な支援用具である一方で、適切な装具の設定や管理が実施されず、在宅生活での装具が一定数使われないという事態も生じる。本講義では、自立した生活を送るために適切な装具処方のポイント、留意事項とともに、患者・家族への教育、在宅での多職種連携による支援について教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	理 学 法 学 領 域 共 通 科 目	地 域 リ ハ マ ネ ー ジ メ ン ト 特 論	<p>(概要) 医療・介護総合確保法により、医療・介護の枠組みは大きく変わろうとしている。リハビリテーション専門職種として、これから構築されていく地域包括ケアシステムの中で、地域の課題を解決するためにどのように取り組み、連携していくのかについて広く知識をもち、地域社会に有益なサービスを提供するためのマネジメント能力を養えるように教授する。(オムニバス方式/15回)</p> <p>(3 吉田剛/2回) これからの地域リハビリテーションを円滑に進めて、持続的な効果を上げていくためには、地域住民の意識を変えていくための具体的な取り組みが必要である。本人が健康知識を身につけること(自助)や地域の高齢者同士が協力し合う体制(互助)が必要であることを教授し、学んだことを生活に取り込み健康行動を変容させていく過程や、そのために活用できるツールの開発など、実効性のある地域リハビリテーションサービスを行うために必要な地域住民に対するマネジメントについて教授する。</p> <p>(4 田中聡一/2回) 変化している医療・介護体制について概観し、今後の医療・介護の方向性やどのような取り組みが必要になってくるかを教授する。また、行政においてどのように地域計画が策定されているか、行政はどのように地域の問題をとらえているのかについて、群馬県および県内市町村の現状を例にとりて教授する。地域リハビリテーションサービスを提供するために必要な多職種連携を行うための方法について、連絡票やカンファレンスなどの活用するツールについても教授する。また、地域リハビリテーションサービスにおいては、地域住民の中に自助・互助の考え方が浸透していくことが大切であることについて教授する。</p> <p>(9 篠原智行/2回) 障害予防やフレイル・介護予防は多くの地域で展開され、関わる理学療法士も多い。そうした活動の人員や予算は、行政や病院施設、大学、あるいは専門職団体など様々である。特に予算が関連する場合、活動の費用対効果が期待される。本講義では実際の活動モデルを例に費用対効果について議論し、学ぶ。</p> <p>(10 中川和昌/7回) すでに始動し始めている地域包括ケアサービスは各地で様々な先進的取り組みがなされている。これらの事例はその地域性(地域住民の意識や資源)によっても特徴付けられているため、いくつかの特徴的な事例を提示し、その中でどのような課題が残っているのか、この地域に合致するスタイルはどれか、今後どのような展開が望まれるのかなど、いくつかのポイントに分けて考える機会を与えるように教授する。また、地域によって異なる問題をもつ地域の実情をどのように把握し、正しく地域の問題を抽出していきながら、地域の実情に合った必要とされる地域リハサービスを行うことができるように、リハビリテーション専門職種である理学療法士としては、どのように地域の実情を捉えていったらよいのか、また、理学療法士が行政に対して積極的に関与していくためには、どのようなマネジメント能力を必要とされるのかについて教授する。</p> <p>(11 正木光裕/2回) 地域におけるリハビリテーションや理学療法において、対象者へのサポート内容を充実させるための地域住民に対するマネジメントは必須である。そのために必要な内容を家族への支援、さらには家族も含めた地域住民・組織に対する自助・互助の促進をテーマに教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	理 学 療 法 学 領 域 共 通 科 目	理 学 療 法 学 領 域 共 通 科 目	<p>理学療法実践学特論</p> <p>(概要) 最新のエビデンスに基づく理学療法実践方法についての知識を身につけ、臨床における問題解決能力を高め、正しく解決方法を選択するための基礎を身につけ、臨床場面に生かせるような能力をつけられるよう教授する。</p> <p>(3 吉田剛／4回) 専門とする神経系理学療法におけるエビデンスを各種ガイドラインなどに基づいて整理し、それらに対する理学療法実践方法について実例をあげながら教授する。特に近年取り組まれているニューロリハや再生医療を取り上げて、最新の実践方法について教授する。また、誤嚥性肺炎の予防についての最新のアプローチ方法および嚥下分野における理学療法に関するエビデンスを整理し、それらに対する予防実践方法について実例をあげながら教授する。</p> <p>(5 解良武士／4回) 循環器や呼吸器、代謝系疾患などの内部障害系理学療法を行ううえで重要となる評価や疾患に対する治療に関するエビデンスを整理し、理学療法実践につなげるための基礎知識について教授する。また、それらの内部障害系疾患に対する理学療法におけるアプローチ方法に関するエビデンスを整理し、各種ガイドラインで推奨されている実践方法の整理と、まだエビデンスはないが注目されている最新の実践方法について教授する。</p> <p>(6 竹内伸行／2回) 近年、痛みや筋緊張の改善などに関する効果が見直され注目されてきている物理療法について、最新の物理療法の紹介とアプローチ方法に関するエビデンスを整理し、より改善効果を高めるための実践方法について教授する。</p> <p>(7 飯塚陽一／1回) いわゆるロコモティブシンドロームなども含んだ運動器疾患に対する運動器障害系理学療法を行ううえで重要となる整形外科的評価および理学療法評価や術式、疾患に対する治療に関するエビデンスなどを整理し、理学療法実践につなげるための基礎知識について整形外科医の立場から教授する。</p> <p>(12 樋口大輔／3回) いわゆるロコモティブシンドロームを中心とした運動器疾患に対する運動器系理学療法におけるアプローチ方法に関するエビデンスを整理し、また運動器障害で大きな問題となる痛みの除去についてのアプローチ方法に関するエビデンスの整理と実践方法についても教授する。</p> <p>(15 田中繁弥／1回) 最近大きな進歩を遂げている認知症の発症予防および認知症の進行予防といった観点から認知症予防についてのアプローチ方法に関するエビデンスを整理し、有酸素運動療法や二重課題運動療法などの新たな理学療法実践方法について教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
地 域 理 学 療 法 学 領 域 専 門 科 目	地域リハビリテーション特 論		<p>(概要) 医療と介護のしくみが変わりつつある今、地域リハビリテーションは、介護予防、健康増進、疾病予防、地域作りなど、地域住民に対して多岐にわたる対応が求められる重要なものとなっている。この講義では、地域リハビリテーションの理念と現状・課題を学習し、地域理学療法学研究および実践に必要な地域リハビリテーションに関する基礎知識、技術を会得し、応用できるようになることを目標に行う。そして、地域理学療法学研究に必要な課題を見つけることができるよう教授する。</p> <p>(3 吉田剛／1回) 地域リハビリテーションに関わる職種は多岐にわたるが、代表的な職種が現在どのようなプログラムで地域リハビリテーション教育を受けているのか、理学療法士教育のものと比較しながら教授する。また、地域リハサービスの中でも通所サービスに焦点を当てて、現在どのように実施されていて、どのような問題点が生じているのかを分析しながら教授する。</p> <p>(4 田中聡一／3回) 地域リハビリテーションの理念と歴史を振り返り、現在までの変遷について教授する。そのうえで地域リハビリテーションの現状を多角的にとらえさせ、様々な原因で生じる地域間格差やそれぞれがもっている課題について教授する。また、地域リハビリテーションに必要な各種専門職者同士の間で行うべき地域連携について、概論的に教授したのちに、実際に行われているクリティカルパスウェイの役割と問題点を踏まえて、医療、介護、保健の各分野が機能的に連携していくためにはどのような対応が必要なのかを考えさせるように教授する。これらの講義を通して、在宅におけるリハビリテーションを支えるための連携がどうあるべきか多角的に基礎知識を教授する。</p> <p>(5 解良武士／2回) 地域リハビリテーションを踏まえて、これまで健康増進に関する取り組みはどのように進められてきたのか、健康増進に関する取り組みの歴史を概観したうえで、最近の健康増進の取り組みの変化や今後どのように健康増進について取り組んでいくことが望まれているのかについて教授する。また、最近の予防対策の必要性の中で、特に疾病予防対策及び再発予防対策に関する取り組みを整理して教授する。</p> <p>(9 篠原智行／1回) 地域リハビリテーションサービスもその財源については、年々厳しくなっており、どうやって費用対効果に優れた地域リハサービスを行うかが行政にとっても大きな課題である。どうやって効果判定を行うのか、どのように最小限の費用で最大限の効果を上げる地域リハビリテーションサービスにするのか、その視点について教授する。</p> <p>(10 中川和昌／5回) 地域づくりに貢献する行政の代表事業である地域リハビリテーション支援体制整備事業を学習させ、我が国におけるこれからの地域づくりの理念、現状、課題について教授する。また、諸外国のものと我が国の取り組みをその背景の違いを踏まえたうえで比較させて教授する。また、健康増進、疾病予防、介護予防に重要な役割を果たす、地域住民への啓発、教育について学習指導する。地域保健施策について、その地域レベル、都道府県レベル、国レベルの理念と現状、課題について教授し、2025年をめどに厚生労働省が構築推進する地域包括ケアシステムについて学習指導する。さらに、その中で訪問サービスや地域ケア会議の在り方について教授する。</p> <p>(11 正木光裕／2回) 地域住民に対する啓発活動の現状について、外国での実践例を挙げて教授する。また、専門職者に対する地域リハビリテーション教育の現状と問題点について、日本での実践例を挙げて教示する。</p> <p>(13 大野洋一／1回) 難病に対する医療制度の歴史や種類、また、難病団体の活動内容を紹介する。さらに難病団体に対する理学療法士としての関わりやこれまでの研究協力経験をもとに、地域リハビリテーションや研究を行う上での工夫点や注意点等を教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目 地 域 理 学 療 法 学 領 域 専 門 科 目	地域理学療法学特論		(概要) 地域理学療法は、介護予防、健康増進、疾病予防、地域作りなど、今や多岐にわたる重要なものとなっている。この講義では、地域理学療法実践に関して重要な知識を各論的に詳細に学習し、地域理学療法学研究に必要な研究計画、研究実践に望めるよう教授する。(オムニバス方式/15回) (3 吉田剛/1回) 特に専門とする神経系障がいに関する地域理学療法研究の実践について概観しながら教授する。脳卒中などの神経系障がいは、医療終了後にも障害の病態が経時的に変化しやすく、それに伴い活動性にも影響を与えるため、地域理学療法の中でも通所・訪問・在宅などの場面で、どのように機能維持及びQOL向上をはかる取り組みがなされているか、またそれらのアプローチのエビデンスはあるのかなどについて教授する。 (4 田中聡一/2回) 地域理学療法実践および研究に必要な知識について、リハビリテーション医学の観点から、特に日本の地域リハビリテーションの中で大きな問題となっている認知症、高次脳機能障がいに焦点を当て、それらに対する研究がどのように展開されているのかについて、その基礎および研究方法を教授する。また、健康寿命の延伸に大きな影響を与える疾病予防に関する基礎とそれらの問題に対する研究方法について教授する。 (5 解良武士/1回) 地域理学療法実践および研究の中で、特に内部障害系理学療法学研究について、機能維持のための取り組みはどのように行われているのか、この分野における再発予防などに対する研究がどのように展開されてきたか教授する。 (10 中川和昌/8回) ロコモ予防などを含んだ運動機能障がいに関する地域理学療法研究の実践について概観しながら教授する。また、地域理学療法研究の中でも一番多くなってきたのは、介護予防に関する研究である。これについては2回に分けて研究の流れを分類して教授する。さらに、地域理学療法システムの研究、地域理学療法に関与する人材育成に関する研究、地域理学療法実践に関する研究報告などに分けて、地域理学療法学研究がどのように行われているのかについて教授する。 (11 正木光裕/1回) 地域において理学療法を展開する上で、福祉用具との関係は重要なものである。対象者の利用やそのための助言に必要な知識のみならず、その開発に関する研究の実際も含めて、広く地域における福祉用具と理学療法のかかわりに関して教授する。 (15 田中繁弥/2回) 地域理学療法の中で核となる活動の一つである介護予防において、その活動の基盤となる研究や実践研究がどのように展開されているのか、さらにその中でも重要な視点である認知症の予防に関する最新の知見に関して教授する。	オムニバス方式
	地域リハビリテーション演習		(概要) この演習では、地域リハビリテーション特論で学習した知識を生かし、各自の研究課題を適切に探索し、選択できるようにするための、情報収集の方法について教授する。そして、得られた情報と知識を基にした、エビデンスの高い研究計画を策定していく過程で質の高い発表および討論ができる能力を身につけるよう指導する。また、実際に近隣行政で行われている地域リハビリテーション活動に数回参加して、その活動報告を行う過程を通して、自分の研究テーマが具体的にどのように役立つのかを考える場を与える。	共同

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	地域理学療法学演習	/	<p>(概要)</p> <p>この演習では、地域リハビリテーション特論、地域理学療法学特論、地域リハビリテーション演習で学習した知識を生かし、地域理学療法調査を題材に各自の研究テーマに関わるデータの収集、分析、考察などの演習を通じて、最終的には地域理学療法学研究の研究計画を立案する能力を高める。そのためには、必要な情報収集、取り上げるべき問題点の整理、研究で使用する評価指標の選定、研究方法の具体化などの過程を通してを実際に演習しながら、各自の研究テーマ決定に即した実践指導をする。そして、それらの過程を通して研究テーマを決定し、他の者にそのテーマの意義と重要性が伝えられるプレゼンテーションができると共に、妥当な研究方法を選択できる能力を身につける。</p>	共同

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法学専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	地 域 理 学 療 法 学 領 域 専 門 科 目	地 域 理 学 療 法 学 特 別 研 究	<p>(概要)</p> <p>地域理学療法分野の研究で、地域連携、地域リハビリテーション組織構築、運動および高次脳機能に対する地域理学療法、地域住民への啓発および教育に関するものを中心に、地域理学療法学研究で意義あるものを研究実施させる。研究テーマの選択、それに対する研究立案と実施、学術論文などによる研究報告を学生が自主的にできるよう指導する。</p> <p>(3 吉田剛)</p> <p>地域における誤嚥性肺炎予防を主体とした取り組みを広げていくために、潜在している誤嚥危険者がどの程度いるのか、それをどのようにピックアップしていけばよいのか、予防を行う必要性のある運動要素は何かを明らかにする研究を指導する。また、効果的で簡便な評価方法の開発と予防教育普及のためのツールの開発などに取り組み、地域理学療法における予防理学療法の一つとしてエビデンスの蓄積をしていくための研究を指導する。</p> <p>(4 田中聡一)</p> <p>地域リハビリテーションの入り口の1つである、病院から地域への社会復帰時に必要な、効率的な入院時リハビリテーションと入院生活の開発と効果検証、および安全性、経済効果などを理学療法の視点から研究指導する。</p> <p>リハビリテーション医学の視点での地域住民への運動、高次脳機能に対するリハビリテーション介入の計画立案、効果検証を研究指導する。</p> <p>また医師の立場から、地域リハビリテーション推進に寄与する専門職者としての理学療法士の調査研究を指導する。</p> <p>(5 解良武士)</p> <p>地域在住の内部障がい者の障害予防や再発予防について特に注目し、退院後の生活の中で呼吸・循環・代謝などの面での機能維持を図ることで運動機能の低下予防にもどのようにつながっていくのか、また、QOLを高めるために、どのような評価やアプローチが必要になるかについて研究指導を行う。さらに、高齢者の転倒予防や介護予防に関する理学療法アプローチのエビデンスを構築するための研究についても指導する。</p> <p>(9 篠原智行)</p> <p>地域での自立した生活を左右する因子の検証を通して、地域理学療法あり方に関する研究指導を行う。中でも転倒に関わるバランス機能や、人の行動を制約する心理状態などを評価する計量心理学的尺度を活用する。また、尺度の構造や臨床的意義など、理学療法評価の検証や提案を行う。</p> <p>(10 中川和昌)</p> <p>地域および国際の両視野から、スポーツ傷害予防、健康増進、CBR、CBEに関して学習指導する。特に運動機能面における効果的な評価法、トレーニング内容、介入効果、教育効果等について検証し、広い視野で地域住民が抱える問題点の解決策を模索・追及する姿勢を指導する。</p> <p>(11 正木光裕)</p> <p>地域の脳性麻痺、ダウン症、発達障害といった小児患者の運動・認知障害に着目し、効果的なリハビリテーションの開発に関する研究指導を実施する。地域の乳幼児の発達および発達促進のためのアプローチに関する研究、また運動学に基づいた成人患者の運動障害およびリハビリテーションに関する研究についても指導する。</p> <p>(13 大野洋一)</p> <p>在宅で生活しているパーキンソン病や脳卒中など神経筋疾患患者を中心に機能回復や在宅生活維持につながるリハビリテーション介入について研究指導を行う。また、難病団体等と協力をして、地域住民に対する疾病の啓発活動等を通し、患者生活の改善につながる研究指導も行う。</p> <p>(15 田中繁弥)</p> <p>地域における高齢者の認知機能および身体機能の関連性を明らかにし、認知機能低下予防に資する運動介入の有効性を検証する研究指導を行う。特に注意機能や全般性認知機能に焦点を当て、認知症進行予防の観点からの介入研究を推進する。また、地域住民に対する予防的関わりの意義についても介入手法を実践的に学べる機会を提供する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	臨 床 理 学 療 法 学 領 域 専 門 科 目	臨 床 理 学 療 法 学 特 論 I	<p>(概要) 理学療法場面で用いられている評価指標について、その開発の経緯や開発方法を学び、臨床理学療法における問題解決および効果判定に活かすための評価指標に関する知識を身につける。特に、帰結評価として用いるべき評価項目は何かについて、機能障害および能力障害面の評価による効果判定を踏まえて、さらに生活自立度、QOL向上、医療経済への影響等についても広い視点をもって考える機会を得る。これらにより、既存の評価指標を踏まえて、新しい評価指標を開発するための基礎を身につける。(オムニバス方式/15回)</p> <p>(2 坂本雅昭/1回) 臨床理学療法において、特に専門とする運動器系疾患における臨床評価項目について、最新の情報を教授すると同時に臨床評価項目の開発事例を通して、開発手順や信頼性及び妥当性の検証などについて教授する。さらに介入効果判定のための帰結評価について、機能障害と能力障害に対する帰結評価項目の開発事例を複数挙げて、評価指標の開発について教授する。</p> <p>(3 吉田剛/1回) 臨床の理学療法場面における問題分析の方法を教授しながら、特にこれからの臨床理学療法で取り組むべき大きな課題である障害予防に必要な評価についてその構成要素は何か、障害予防の研究に資するように考えさせながら教授する。また、臨床理学療法における研究を考えるうえで必要となる新たな評価指標について、その開発のための研究につなげるように教授する。</p> <p>(6 竹内伸行/11回) 臨床理学療法において、特に専門とする神経系疾患における臨床評価項目について、最新の情報を教授すると同時に臨床評価項目の開発事例を通して、開発手順や信頼性及び妥当性の検証などについて教授する。さらに介入効果判定のための帰結評価について、機能障害と能力障害に対する帰結評価項目の開発事例を複数挙げて、評価指標の開発に関する指導を行う。</p> <p>(14 富田洋介/2回) 協調運動障害は理学療法の臨床場面で頻繁に遭遇する臨床症状である。臨床場面で用いられる協調性評価および介入方法について教授する。特に、協調性障害の疾患特性とそれに対応した測定・解析方法とともに、治療的介入のエビデンスについて、ケースを提示しながら紹介する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法学専攻博士前期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目 理 学 療 法 学 領 域 専 門 科 目	臨床理学療法学特論Ⅱ	/	(概要) 臨床の理学療法場面における介入研究について、最新の情報を整理すると同時に、問題解決につながる介入方法を検討するための基礎を身につける。さらに、介入研究を行う際にどのような準備が必要か、研究デザインの選択、介入効果の検証に用いる帰結評価の選定などについて、文献的に検証しながら、介入研究を行うための基礎的知識を身につける。(オムニバス方式/15回) (3 吉田剛/2回) 臨床理学療法における介入研究の中で、特に最新の嚥下障害に対する理学療法介入研究と誤嚥性肺炎予防などに関わる評価、介入の実際について最新の知見を教授する。また、最新のニューロリハビリテーションで用いられる代表的なアプローチ法について整理しながら、介入効果の検証について今まで行われてきた研究手法を挙げて教授する。 (5 解良武士/3回) 最新の循環器系疾患、呼吸器系疾患、代謝系疾患などの内部障害領域の疾患に対する臨床理学療法介入についてその研究デザインや介入方法、帰結評価の選択などについて整理し、最新の臨床理学療法介入研究の動向を踏まえて教授する。 (6 竹内伸行/2回) 臨床理学療法の中で、特に痙縮に対する理学療法アプローチについて触れ、また近年大きく見直されてきている物理療法を用いた介入研究についての最新の情報を整理し、その研究デザインや介入方法、帰結評価の選択などについて整理し、介入研究の研究方法について教授する。 (7 飯塚陽一/1回) 整形外科領域における新たな理学療法介入を考案するために必要な最新の医学分野の動向を教授する。特に脊椎疾患に対する治療についてのエビデンスを整理する。 (13 樋口大輔/5回) 最新の整形外科領域における理学療法介入について、その研究デザインや介入方法、帰結評価の選択などについて整理し、最新の理学療法介入研究の動向を踏まえて教授する。また、臨床理学療法において大きな阻害因子となる疼痛に対する最新のアプローチ法についてエビデンスを含めて情報を整理すると共に、その研究デザインや介入方法、帰結評価の選択などについて整理し、介入効果の検証について教授する。 (14 富田洋介/2回) 最新の協調運動障害に対する理学療法介入について、その研究デザインや介入方法、帰結評価の選択などについて整理し、最新の理学療法介入研究の動向を踏まえて教授する。また、介入研究と通じたエビデンスの構築の意義について教授する。	オムニバス方式
	臨床理学療法学演習Ⅰ	/	(概要) 理学療法士の立場で臨床における問題点を抽出すると同時に、それらの問題について明確に評価するための評価指標の検討を行う。また、各自の興味ある分野の問題に焦点を当てて、問題解決に必要なプロセスについての理解を深め、研究テーマの絞り込みと関連論文の考証、使用する評価指標の選択および新たな開発の準備などについて教授する。	共同
	臨床理学療法学演習Ⅱ	/	(概要) 臨床における研究課題について具体的な解決方法を見出し、必要な介入方法についての検討を進める。さらに、妥当な問題解決方法を模索し、他者に分かるような論理構成で、科学的手法を用いた研究計画を作成するための準備を行わせ、研究計画書の作成過程を指導する。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
基 礎 科 目	医療・研究倫理学		<p>(概要) 医療の倫理、安全管理、研究倫理等、理学療法管理およびその研究における基本的、かつ本質的なノンテクニカルスキルについて教授する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 渡邊秀臣/5回) リハビリテーション職種間における多職種連携の意義、コミュニケーションの有用性など、チームワークの意義とそのエビデンスについて、医療事故の状況をしめして平時からのヒューマンファクターによる医療事故防止について、そして医療事故とインシデント報告制度による事故発生後の対応について概要を教授する。最終回では全講義から学生の意見を提出させ、それぞれの倫理、安全についての意見を共有する。</p> <p>(4 田中聡一/4回) リハビリテーションにおける感染症管理、認知症患者のコミュニケーション、リスク管理、そして患者拘束等、人間性に配慮した安全管理について、また研究倫理について教授する。</p> <p>(7 飯塚陽一/3回) 脊髄損傷など重篤な後遺症患者に対するインフォームドコンセント、救命救急、手術などの高度医療に対する管理、そして医療倫理について教授する。</p> <p>(6 竹内伸行/3回) 理学療法分野における組織管理、診療報酬にかかわる就業管理、そして臨床実習や卒後教育の倫理について教授する。</p>	オムニバス方式
	リハビリテーションシステム論		<p>(概要) リハビリテーションシステムの現状と課題について概要を教示する。また、リハビリテーションシステムの要素となる患者中心アプローチ、多職種連携、段階的アプローチ、包括的ケア、技術の統合、エビデンスの構築などの現状と課題について教示する。また、リハビリテーションの効果を最大化するための総合的なシステム設計や新たなリハビリテーションシステムの構築について提案できるよう教授する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(2 坂本雅昭/3回) リハビリテーションシステムの現状と課題について国内外の概要、リハビリテーションチームにおける理学療法士の専門職としての役割および新たなリハビリテーションシステム構築の可能性について教示する。</p> <p>(4 田中聡一/2回) 入院患者の在宅復帰に向けたリハビリテーションシステムおよび神経難病患者に対するリハビリテーションシステムの現状と課題について教示する。</p> <p>(④ 吉田剛/2回) 地域におけるリハビリテーション活動の現状と課題について整理し、新たな地域リハビリテーションシステムの構築について教示する。</p> <p>(5 解良武士/2回) 地域虚弱高齢者の疫学的データから、保健・医療・福祉のニーズを把握し、リハビリテーションシステム改善点について教示する。</p> <p>(9 篠原智行・2回) 地域リハビリテーション活動の際に用いる各種評価指標の妥当性と信頼性について整理し、効果判定の手法について教示する。</p> <p>(12 樋口大輔・2回) 運動器疾患患者の病態と予後について整理し、地域におけるQOL向上のためのリハビリテーションシステムについて教示する。</p> <p>(8 千木良佑介/2回) 内部障害系患者の病態を整理し、また中高年齢者の健康評価について整理し、地域における健康運動システムについて教示する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
基礎科目	理学療法教育・管理論		<p>(概要) 理学療法士養成施設および臨床実習施設における理学療法学生に対する教育や、医療・福祉施設等におけるリハビリテーション職員に対する教育の実際と課題について、国内外の状況を交えて教示する。その後、理学療法学生あるいは理学療法士に対する教育のこれからのあり方について、幅広い視野から新たな視点を提言できるよう教授する。</p> <p>また、理学療法分野における組織運営、リハビリテーション関連職種および他職種との協働、リスクマネジメントに関する現状と課題について、国内外の状況を交えて教授する。特に、リスクマネジメントについては、管理者の立場として事故要因分析を行うとともに、その結果に基づいた安全管理を実践し、新たな視点を提言できるように教授する。(オムニバス方式/全30回)</p> <p>(9 篠原智行/10回) 理学療法教育(卒前・卒後)と管理に関する国内外の動向や、on the job trainingのあり方、多職種連携について教示する。また、施設等での理学療法士教育や管理に携わる人材育成や、広い視点に基づいた新たな教育や管理に関する提言ができるよう教示する。</p> <p>(5 解良武士/5回) 理学療法教育(卒前)に関わる理学療法教育の組織構造や質について教示する。</p> <p>(6 竹内伸行/5回) 理学療法管理に関する組織運営やリスクマネジメントについて教示する。</p> <p>(12 樋口大輔/5回) 理学療法教育(卒前・卒後)に関する臨床実習や、養成校卒業前後のシームレスな教育について教授する。</p> <p>(10 中川和昌/5回) 理学療法教育(卒前)に関わるカリキュラム構造や評価、国際状況について教示する。</p>	オムニバス方式
専門科目	基礎理学療法学特講		<p>(概要) 様々な疾患や障害およびその治療的介入について、生理学や細胞生物学をはじめとする基礎医学的知見に基づいたエビデンスを教授する。また、慢性疼痛やフレイル、局所循環障害など、理学療法の対象者が有する代表的かつ治療に難渋する病態について、最新の報告を取り上げながら、現状と課題について整理する。そのうえで、これらの病態に対する効果的な理学療法を提案できるように教授する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(① 竹内伸行/4回) 基礎理学療法学に関する国内外の動向、慢性疼痛の生理学機序の理解と電気生理学的手法を用いた定量的評価、基礎理学療法学のローカルとグローバルについて教授する。</p> <p>(② 千木良佑介/4回) 局所循環障害およびサルコペニアに対する定量的評価、トレーニング科学から得られる情報と理学療法との関係、基礎理学療法学のイノベーションについて教授する。</p> <p>(③ 大野洋一/4回) 動物実験より得られる情報と理学療法との関係、神経可塑性および内分泌調整の生理学に基づいた評価、基礎理学療法学の教育について教授する。</p> <p>(14 富田洋介/3回) 基礎研究から得られた運動制御理論の変遷、中枢神経興奮性の電気生理学的評価、運動学および電気生理学的指標に基づく評価について教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	基礎理学療法学演習		<p>(概要) 様々な疾患や障害について、生理学や細胞生物学をはじめとする基礎医学的知見に基づいた理学療法評価および、その評価に基づいた治療的介入を行うための視点についてアクティブラーニングを主体として教授する。特に慢性疼痛やフレイル、局所循環障害などの病態については、最新の理学療法評価に関するエビデンスを取り上げながら、運動や物理的刺激による基礎医学的視点を重視した理学療法介入を提案できるように教授する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(① 竹内伸行/4回) 基礎理学療法学領域に関する治療的介入の国内外の動向、慢性疼痛に対する理学療法介入、基礎理学療法学のローカルとグローバルにおける発展について教授し、文献抄読および討論を行う。</p> <p>(② 千木良佑介/4回) 局所循環障害およびサルコペニアに対する理学療法介入、トレーニング科学の基礎研究と理学療法への応用、基礎理学療法学のイノベーションと臨床応用について教授し、文献抄読および討論を行う。</p> <p>(③ 大野洋一/4回) 動物を用いた基礎研究と理学療法介入への応用、神経可塑性および内分泌調整に対する理学療法介入、基礎理学療法学の教育と発展について教授し、文献抄読および討論を行う。</p> <p>(14 富田洋介/3回) 運動制御理論に基づく理学療法介入、中枢神経興奮性の変調を利用した理学療法介入、運動学および電気生理学的評価に基づく理学療法介入について教授し、文献抄読および討論を行う。</p>	オムニバス方式
	神経・発達理学療法学特講		<p>(概要) 神経・発達理学療法学の基盤となる神経科学や運動学、発達科学に関する基礎研究によるエビデンスを教示し、基礎研究の知見を臨床活動に還元する能力の向上に寄与する。また、脳卒中やパーキンソン病、脊髄小脳変性症、脳性麻痺、発達障害、発達性協調運動障害をはじめとする中枢疾患患者の障害像および理学療法の実践、ニューロモデュレーションに関する臨床研究によるエビデンスを教示する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(11 正木光裕/4回) 神経・発達理学療法学に関する国内外の動向(発達および加齢に対応した神経・発達分野の理学療法概要)、神経・発達理学療法学のローカルとグローバルについて教示する。また、基礎研究として発達科学、臨床研究として脳性麻痺、発達障害、発達性協調運動障害を有する小児の障害像および理学療法の実践、ニューロモデュレーションについて教示する。</p> <p>(④ 吉田剛/3回) 神経・発達理学療法学の教育について教示する。また、臨床研究として脳卒中患者の障害像および理学療法の実践について教示する。</p> <p>(4 田中聡一/3回) 基礎研究として神経科学、臨床研究としてパーキンソン病患者、脊髄小脳変性症患者の障害像および治療・リハビリテーションの実践について教示する。</p> <p>(9 篠原智行/2回) 神経・発達理学療法学のイノベーションについて教示する。また、臨床研究として脳卒中患者の障害像および理学療法の実践について教示する。</p> <p>(14 富田洋介/3回) 基礎研究として神経科学、運動学、臨床研究として脳卒中患者の障害像および理学療法の実践について教示する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	神経・発達理学療法学演習		<p>(概要) 神経科学や運動学、発達科学に関する基礎研究、また中枢疾患患者の障害像および理学療法の実際、ニューロモデュレーションに関する臨床研究による最新のエビデンスについて、受講生による文献抄読発表、討論を通じて知見を深める。文献抄読発表、討論を通じて得られた知見を、基礎および臨床研究のデザイン立案、研究実施、成果発信に応用することを目的とする。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(11 正木光裕/4回) 神経・発達分野の理学療法における文献抄読発表、討論の進め方、先行研究(日本語論文、英語論文)の調べ方・読み方・まとめ方について教示する。また、神経・発達理学療法学に関する基礎および臨床研究(統計方法の習得を含む)、脳性麻痺、発達障害、発達性協調運動障害を有する小児の障害像および理学療法の実際、ニューロモデュレーションについての文献抄読発表、討論を担当する。</p> <p>(4 吉田剛/3回) 脳卒中患者の障害像および理学療法の実際についての文献抄読発表、討論を担当する。</p> <p>(4 田中聡一/3回) 先行研究(日本語論文、英語論文)における研究デザイン・研究倫理・利益相反について教示する。また、パーキンソン病患者、脊髄小脳変性症患者の障害像および治療・リハビリテーションの実際についての文献抄読発表、討論を担当する。</p> <p>(9 篠原智行/2回) 神経・発達理学療法学に関する基礎および臨床研究(統計方法の習得を含む)、脳卒中患者の障害像および理学療法の実際についての文献抄読発表、討論を担当する。</p> <p>(14 富田洋介/3回) 神経・発達理学療法学に関する基礎および臨床研究(統計方法の習得を含む)、脳卒中患者の障害像および理学療法の実際についての文献抄読発表、討論を担当する。</p>	オムニバス方式
専 門 科 目	運動器・スポーツ理学療法学特講		<p>(概要) 高度専門職者としての理学療法士のために必要な知識・技術を習得し、国際的な活躍や、教育への貢献に活かせるような、多様な運動器の問題に対する理学療法学的科学的根拠およびその実践方法、スポーツ外傷・障害予防に関わる科学的根拠に基づいた知識と技能を教示する。トップアスリートの支援のみならず、小児から高齢者まで、対象者の健康増進と体力向上を図り、併せて安心・安全な地方スポーツ振興に貢献するために必要な知識について教示する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(10 中川和昌/8回) 運動器・スポーツ理学療法に関する社会的背景、評価・治療方法や技術に関して教示する。特にスポーツ外傷・障害に対する理学療法学的科学的根拠、評価・治療方法や技術に関して教示する。また運動器・スポーツ理学療法における教育の歴史や現状、国際動向に関しても教示する。</p> <p>(2 坂本雅昭/2回) スポーツ理学療法最新の動向に関して教示する。また下肢疾患の運動器・スポーツ理学療法学的科学的根拠、評価・治療方法や技術に関する最新の情報・動向を教示する。</p> <p>(7 飯塚陽一/2回) 整形外科医の視点から、運動器疾患に対する医療の最新の情報を教示する。特に脊椎疾患に関する医療の科学的根拠、評価・治療方法について教示する。</p> <p>(12 樋口大輔/2回) 運動器理学療法最新の研究知見について教示する。また脊椎疾患の理学療法における科学的根拠、評価・治療方法について教示する。</p> <p>(17 高橋裕子/1回) 地域における運動器理学療法の活動を紹介し、特に予防学的視点からその科学的根拠や最近の動向について教示する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	運動器・スポーツ理学療法学演習		<p>(概要) 多様な運動器の問題、スポーツ外傷・障害に対する理学療法学的科学的根拠およびその実践方法、予防に関する議論を主体とする。トップアスリートの支援のみならず、小児から高齢者まで、対象者の健康増進と体力向上を図り、併せて安心・安全な地方スポーツ振興に貢献するために必要な知識・エビデンスを収集・整理し、理学療法士として必要な知識・技術に関して検討する。加えて国内外の運動器・スポーツ理学療法学的動向や国際事情、教育体制についても議論し、その課題や問題点を明確化する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(10 中川和昌/8回) 運動器・スポーツ理学療法に関する社会的背景、評価・治療方法や技術に関して議論する。特にスポーツ外傷・障害に対する理学療法学的科学的根拠、評価・治療方法や技術、地域における予防活動に関して議論し、その課題や問題点を明確化する。また運動器・スポーツ理学療法における教育の歴史や現状、国際動向についても議論し、その課題や問題点を明確化する。</p> <p>(2 坂本雅昭/2回) 運動器・スポーツ理学療法最新の知見や動向を踏まえ、特に下肢疾患の運動器・スポーツ理学療法学的科学的根拠、評価・治療方法や技術に関して議論し、その課題や問題点を明確化する。</p> <p>(7 飯塚陽一/1回) 整形外科医と理学療法士が協働し、運動器疾患に対するより効果的な治療ができるための科学的根拠、評価・治療方法について議論し、その課題や問題点を明確化する。</p> <p>(12 樋口大輔/2回) 運動器・スポーツ理学療法最新の知見や動向を踏まえ、特に脊椎疾患の運動器・スポーツ理学療法学的科学的根拠、評価・治療方法や技術に関して議論し、その課題や問題点を明確化する。</p> <p>(17 高橋裕子/2回) 地域における運動器理学療法学的活動について、特に予防学的視点からその科学的根拠や最近の動向を踏まえた上で議論し、その課題や問題点を明確化する。</p>	オムニバス方式
科 目	加齢・予防理学療法学特講		<p>(概要) 増加の一途を辿る高齢者の特性に根ざした介護予防の実践・指導のあり方について、国内外の動向を踏まえつつ教示する。また、介護予防の重要な要素となるフレイルならびに循環器病、認知症に関するエビデンスを教示する。フレイルや循環器病、認知症に対する個別支援(ハイリスクアプローチ)や通いの場等への積極的関与(ポピュレーションアプローチ)の実際を示し、介護予防のための革新的な活動計画が提案できるように教授する。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(12 樋口大輔/3回) 加齢・予防理学療法学的動向や期待されるイノベーション、ならびに、フレイルに対する個別支援・集団支援(特に他職種による支援)に関して教授する。</p> <p>(5 解良武士/3回) フレイルに関するエビデンス(特にサルコペニアの影響)、加齢・予防理学療法学研究法、さらには、加齢・予防理学療法学的ローカル、グローバルの両面性に関して教授する。</p> <p>(9 篠原智行/3回) 高齢者の特性(特に心理・性格)、フレイルに対する個別支援・集団支援(特に地域理学療法学的あり方)、さらには、加齢・予防理学療法学分野における教育に関して教授する。</p> <p>(8 千木良佑介/2回) 循環器病に関するエビデンスおよび個別支援・集団支援(特に就業年代への運動介入の効果と実際)に関して教授する。</p> <p>(15 田中繁弥/2回) 認知症に関するエビデンスおよび個別支援・集団支援(特に認知機能評価法、運動介入の実際)に関して教授する。</p> <p>(16 齊田高介/2回) 高齢者の特性(特にバランス)、ならびに、フレイルに関するエビデンス(特に社会的孤立の影響)に関して教授する。</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目	加齢・予防理学療法学演習		<p>(概要) 増加の一途を辿る高齢者の特性に根ざした介護予防の実践・指導のあり方について、国内外の動向を踏まえつつ議論する。介護予防の重要な要素となるフレイルならびに循環器病、認知症に関するエビデンスを収集・整理しながら課題を明らかにする。また、課題解決に向けた方策について個別支援（ハイリスクアプローチ）や通いの場等への積極的関与（ポピュレーションアプローチ）の双方の観点から検討する。（オムニバス方式／全15回）</p> <p>(12 樋口大輔／3回) 加齢・予防理学療法学の国内外の動向や期待されるイノベーション、ならびに、フレイルに対する個別支援・集団支援（特に他職種による支援）に関して総合的に議論する。</p> <p>(5 解良武士／3回) フレイルに関するエビデンス（特にサルコペニアの影響）、加齢・予防理学療法学専攻法、さらには、加齢・予防理学療法学のローカル、グローバルの両面性に関して総合的に議論する。</p> <p>(9 篠原智行／3回) 高齢者の特性（特に心理・性格）、フレイルに対する個別支援・集団支援（特に地域理学療法あり方）、さらには、加齢・予防理学療法分野における教育に関して総合的に議論する。</p> <p>(8 千木良佑介／2回) 循環器病に関するエビデンスおよび個別支援・集団支援（特に就業年代への運動介入の効果と実際）に関して総合的に議論する。</p> <p>(15 田中繁弥／2回) 認知症に関するエビデンスおよび個別支援・集団支援（特に認知機能評価法、運動介入の実際）に関して総合的に議論する。</p> <p>(16 齊田高介／2回) 高齢者の特性（特にバランス）、ならびに、フレイルに関するエビデンス（特に社会的孤立の影響）に関して総合的に議論する。</p>	オムニバス方式
	理学療法学特別研究		<p>(概要) 各分野指導教員により、関連分野の研究動向、研究計画、データ解析、論文作成・投稿までを1年次から在学期間を通して指導する。</p> <p>(1 渡邊秀臣) 高度専門化する理学療法の実践において、医療倫理への配慮、医療事故防止など、チーム医療の中で多職種連携の観点からノンテクニカルスキルの向上に関する研究を指導する。</p> <p>(2 坂本雅昭) 運動器系およびスポーツ理学療法に関するエビデンスの確立に資する研究指導を行う。運動器系疾患の急性期から術後プログラムの開発のみならず、予防的介入プログラム開発に向けた研究の指導を行う。また、スポーツ活動に伴う外傷・障害とその予防に関する研究の指導を行う。</p> <p>(4 吉田 剛) 予防理学療法の中でも誤嚥性肺炎予防や摂食嚥下機能低下の予防などに関する研究を中心に指導する。また、姿勢が将来の機能変化にどのような影響を与えるか、栄養状態が機能改善や生命予後にどのように関わるかなども注目して研究を進め、これらの研究を通して、予防理学療法や栄養・嚥下理学療法のエビデンスの構築に寄与していけるよう指導を行う。</p> <p>(4 田中聡一) 認知症予防に関するリハビリテーションの研究、認知症高齢者に対する地域リハビリテーションと地域作りに関する研究、パーキンソン病に対する薬物とリハビリテーションの併用療法に関する研究、リハビリテーションによる入院患者の身体的精神的機能低下予防、身体拘束予防および医療スタッフの負担軽減に関する研究についての指導を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(保健医療学研究科 理学療法専攻博士後期課程)

科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 科 目			<p>(5 解良武士) メタボリックシンドロームやロコモティブシンドロームなど、加齢や退行に伴う心身機能の低下に関連する症候群、および老年期に発生するフレイルやサルコペニアの原因、診断、予防、対処に関する新しい知見を、理学療法の視点から探求する研究の指導を行う。</p> <p>(① 竹内伸行) 急性痛および慢性痛の要因や機序、それらから生じる二次的な生体反応などの解析に加えて、疼痛緩和のための治療的介入に関する研究を指導する。また、様々な物理的刺激に対する生体反応と、その評価およびそれらに応用した治療的介入に関する研究の指導を行う。</p> <p>(7 飯塚陽一) 悪性腫瘍や救急外傷、脊椎脊髄疾患など、急性期に高度医療を要する運動器疾患や重篤な後遺症を伴う運動器疾患に対する、より効果的な治療体系の確立に寄与する理学療法分野の評価・治療方法に関する研究を指導する。</p> <p>(② 千木良佑介) 内部障害系理学療法全般(呼吸・循環・代謝)に関するもの、その中で重要な筋力トレーニング、有酸素運動についての基礎的研究、様々な内・外的要因が筋出力や心肺機能一代酬に与える影響についての研究を指導する。</p> <p>(9 篠原智行) 地域高齢者のフレイル評価および介護予防介入に関する研究、地域高齢者や脳卒中などの疾患を有する対象者を対象としたバランス機能の尺度研究、さらに心理的尺度と性格尺度を組み合わせた研究を指導する。研究計画、データ測定、解析に加え、国内外の学会発表や雑誌投稿を通じた研究成果の公開についても指導を行う。</p> <p>(10 中川和昌) スポーツ理学療法に関する研究を中心に指導を行う。対象は児童・学童からアスリート、中高年者まで、運動器スポーツ外傷・障害予防やリハビリテーション、トレーニングの効果検証、体力向上や健康増進のためのアプローチまで、幅広く理学療法の関わりについて取り扱う。また理学療法教育に関する研究も指導する。</p> <p>(11 正木光裕) 脳性麻痺、ダウン症候群、発達障害といった小児患者の運動・認知障害およびリハビリテーションに関する研究、乳幼児の発達および発達促進のためのアプローチに関する研究、また運動学に基づいた成人患者の運動障害およびリハビリテーションに関する研究の指導を行う。</p> <p>(12 樋口大輔) 特に慢性的な痛みを抱える地域在住高齢者のフレイル予防およびQOL向上に資する研究、ならびに、デジタルヘルスケアの進化・普及に向けた研究を指導する。データ解析では、機械学習をはじめとする最新解析技術を活用し、加齢・予防理学療法領域の科学的エビデンスの確立を目指す。</p> <p>(③ 大野洋一) パーキンソン病や脳卒中など脳・神経の機能変化により生じる疾患に対し、動物を用いた基礎研究を主体として生理学的側面から解釈し、理学療法の可能性を検討する研究を指導する。</p> <p>(14 富田洋介) 主に神経系疾患を有する対象者の歩行障害、姿勢バランス障害、上肢運動機能障害の病態および回復メカニズムを、行動神経科学、神経生理学、バイオメカニクスの視点から解明し、その知見を基にした理学療法評価法や治療手段の開発に貢献する研究を指導する。</p>	

学校法人高崎健康福祉大学 設置認可等に関わる組織の移行表

令和7年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和8年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
高崎健康福祉大学				高崎健康福祉大学				
健康福祉学部				健康福祉学部				
医療情報学科	80	—	310	医療情報学科	80	—	320	
社会福祉学科	75	—	285	社会福祉学科	75	—	300	
健康栄養学科	80	—	320	健康栄養学科	80	—	320	
薬学部				薬学部				
薬学科	90	—	540	薬学科	90	—	540	
保健医療学部				保健医療学部				
看護学科	100	—	400	看護学科	100	—	400	
理学療法学科	40	—	160	理学療法学科	40	—	160	
人間発達学部				人間発達学部				
子ども教育学科	80	—	320	子ども教育学科	80	—	320	
				<u>心理学科</u>	<u>40</u>		<u>160</u>	学科の設置（認可申請）
農学部				農学部				
生物生産学科	75	—	325	生物生産学科	75	—	300	
計	620	—	2,660	計	<u>660</u>	—	<u>2,820</u>	
高崎健康福祉大学大学院				高崎健康福祉大学大学院				
健康福祉学研究科				健康福祉学研究科				
医療福祉情報学専攻 (M)	3	—	6	医療福祉情報学専攻 (M)	3	—	6	
保健福祉学専攻 (M)	3	—	6	保健福祉学専攻 (M)	3	—	6	
食品栄養学専攻 (M)	4	—	8	食品栄養学専攻 (M)	4	—	8	
保健福祉学専攻 (D)	3	—	9	保健福祉学専攻 (D)	3	—	9	
食品栄養学専攻 (D)	2	—	6	食品栄養学専攻 (D)	2	—	6	
薬学研究科				薬学研究科				
薬学専攻 (D)	3	—	12	薬学専攻 (D)	3	—	12	
保健医療学研究科				保健医療学研究科				
看護学専攻 (M)	6	—	12	看護学専攻 (M)	6	—	12	
理学療法学専攻 (M)	3	—	6	理学療法学専攻 (M)	3	—	6	
				<u>理学療法学専攻 (D)</u>	<u>2</u>	—	<u>6</u>	課程の変更（認可申請）
農学研究科				農学研究科				
生物生産学専攻 (M)	4	—	8	生物生産学専攻 (M)	4	—	8	
生物生産学専攻 (D)	2	—	6	生物生産学専攻 (D)	2	—	6	
計	33	—	79	計	<u>35</u>	—	<u>85</u>	